

VI. 道徳教育研究

目 次

- 1 はじめに
- 2 ゲストティーチャーとつながる道徳 Do-Tok 新しい時代へ
- 3 道徳の授業づくりで大切にしてきたこと
- 4 多様性を尊重する道徳の授業 ～家族のカタチを考える～
- 5 「一人も見捨てへん」道徳教育の推進

1 はじめに

1 道徳教育研究会について

今年度の道徳教育研究会では「豊かな人間性を育む」ことを最重点の取り組みとし、同時に「全ての子どもが自ら考え、判断し、実行し、自己の行為の結果に責任を持つこと」をめざし、各学校が発表に向けて実践を進めた。

2 研究テーマ

「多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める道徳の授業づくりについて」

3 活動概要

道徳教育研究員連絡会

第1回：道徳教育部門研究会について

第2回：今年度の目標（研究テーマ）の設定を報告

第3回：ZOOMによる進捗状況の報告と交流

令和3年に開催された茨木市教育センター研究報告会において2名の研究員が発表を行った。

2 ゲストティーチャーとつながる道徳 Do-Tok 新しい時代へ

渡部 恭子

1 はじめに

本研究会では、今年度は『多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める道徳の授業づくりについて』というテーマで研究を行ってきた。このテーマの実現のためには、道徳の授業において、次の3つの点が重要であると考えている。

- ・児童が、自己の生き方について考えを深めることができるような、教材の読取りができていること
- ・児童が多面的・多角的に思考することができるしかけがあること
- ・授業が終わっても、どこか心に残るような問い等があること

以上のことをふまえ、本校において、文化庁の芸術家派遣事業を活用し、プロの俳優を招いて道徳の授業を計画・実施した。取組み方法としては、道徳の授業とゲストティーチャーをつなぐ新しい試みを行い、それを Do-Tok（ドゥートック）と名付けた。

2 Do-Tok の取組みについて

道徳の教科化が始まり、野菜作りや清掃活動のような単なる体験にとどまってしまう授業や、道徳的価値の位置づけが不明確なゲストティーチャーの講話は、少なくなっていると思われる。だが、実際に体験することの楽しさや、わかりやすさには、捨てがたい魅力がある。



そこで、道徳の教材と、ゲストティーチャーを招いた体験活動をうまく結びつけて、多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深めることができるような道徳の授業方法である Do-Tok の取組みを考案した。(図-1 参照)

道徳の授業に慣れていない若手教員も楽しく授業することができるように、道徳教育推進教師である私が中心となり、教材の選定、板書のレイアウト枠の作成、授業のすすめ方の発案、振返りのワークシートの作成等を行った。

教材	1、2年 「黄色いベンチ」	授業の役割	俳優(T1) 劇、授業をすすめる
	3年 「かるた遊び」		担任(T2) 板書を書く
	4、5、6年 「雨のバス停留所で」		
時間配分	体育館で劇の鑑賞（約10分）→移動（約5分）→各教室で授業（約30分）		

3 多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める道徳の授業づくり

(1) プロの俳優の生の演技を見ることで、児童の教材の読取りを深める

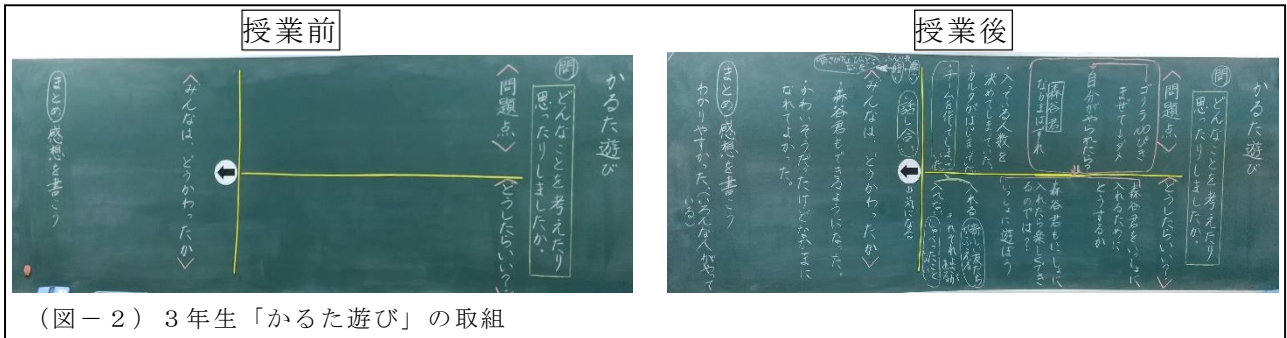
5年生で実施した「雨のバス停留所で」は、雨宿りをしながらバスを待つ人々の思いを想像することが授業における重要な鍵となる。だが、待っている人達の気持ちを想像することが苦手な児童がいたり、並んではいけないが、先に来ている人を優先にして、自然に順番ができていくという状況を読み取ることが難しい児童がいることも、

これまでの授業経験からわかっていたことである。そこで、待っている人々の様子や、主人公がバスに乗り込む様子に重点を置いてプロの俳優が演じた。

(2) 板書の工夫で、多面的・多角的に思考できるしかけづくり

板書は、下の図-2の左のように、あらかじめ枠組みを作っておくと、多面的・多角的に考えるヒントになる。また、授業が進んで、友だちの意見がそれぞれの枠に書き込まれていくにつれ、多様な意見があることに気づきやすくなる。

今回の取組みでは、発問を「どんなことを思ったり考えたりしましたか。」の1つにしぼり、なるべくたくさんの子どもの意見を聞き、俳優は、それに対して共感を示すことで、授業をすすめていくことにした。



(図-2) 3年生「かるた遊び」の取組

(3) 心に残る授業づくりをめざして

道徳で、プロの俳優の演技を体験し、その俳優が自分たちのクラスに来て、授業を行ったことは、子どもたちの心に残る体験だったと思われる。

だが、俳優は演技のプロであるが授業のプロではない。授業が本来の目的と少しそれてしまうこともある。俳優にとって、私たちプロの教員の前で授業をするのは、とても緊張することなのだそうで、それならば、俳優も教員も子どもたちと一緒に楽しむことが一番である。今回は、俳優には質の高い劇を期待し、授業においては発問を1つに絞り、私たち教員が板書をまとめることでサポートを行った。

課題としては、発達に困難さのある子どもたちの一部が、道徳の内容よりも、お笑いの場面に強い印象を受けていたことである。少し残念に感じるものの、その子たちが、こんなにも楽しそうに道徳の授業を受けていたことがあったらどうか、ということに気づかされた。今後は、時々、いつもと違う手法を使うことや、今回のような Do-Tok の取組みを計画することも視野に入れ、より良い授業づくりをしていきたい。

4 おわりに

この取組みで一番良かったことは、子どもたちが笑顔で楽しんでいる様子が多く見られたことである。さらに、今回の授業後に、保護者から「自分の子どもが、この取組みで、誰にでも自分の気持ちを素直に伝えることが大事だということがわかったと言っている。ありがとうございました」と学校に電話があった。Do-Tok の取組みは、まだ始まったばかりである。今後も子どもたちが笑顔になれるように、さらに研究を重ねていきたい。

<p>かるた遊び</p> <p>さ、し、うてきに森谷君 とち人がなかくてきて よかばと思ひました。 けさもつらひきは、 すくおもしろかった。 人間のけさは来とはがら 感かてした。</p>	<p>かるた遊び</p> <p>道とくの紙はりもわ かりやすかた ・(理曲)えんぎかうまかたし ・おもしろかたからです</p>
<p>かるた遊び</p> <p>はくは、誰かのうたかておもしろ くは、難かたです。でも中まがた れたと、おもしろく思ひました。 ひでし、おもしろく思ひました。 すまじかとうさう思ひました。</p>	<p>かるた遊び</p> <p>森谷君がこれい、しに遊ばへ に、悲しむて、自分な思ひ を、かたにたてあげたい思ひ ます。 昔、おもしろい森谷君とい になりに入れた、森谷君は おもしろい、おもしろい思ひ 思ひます。</p>

3 道徳の授業づくりで大切にしてきたこと

木下昌和

1 はじめに

道徳の授業をみなさんはどのようにとらえているだろうか。私は正直に言うと、道徳の授業に対して苦手意識がある。「週に1回の授業だし、自分が高尚なことを話せる自信もないし、道徳の授業って難しそう」そのようなとらえであった。ただ、今年度、道徳の授業改善を進める中で、少しずつ授業の中での子どもたちの反応や授業後のふり返りで変化が見られた。教科書通りの実践であるが、「これぐらいだったらできそう」と読んでくださった方の参考になれば幸いである。

2 大切にしてきた8つのこと

(1) 教科書をよく読んで、ワークシートを作成する

教科書には、その教材での指導項目、目標が必ず最初に書かれており、教材の最後には、子どもたちに問うポイントが書かれている。また、指導書付属のDVD-Rにワークシートがあり、それを活用しながら児童の実態に合わせて加筆修正することで、授業の発問と展開を考えた。

(2) 板書を工夫する

まず、教材名を書いてめあてを書く。次に、登場人物とその関係を整理して板書し、児童にとって視覚的にわかりやすくした。その後、発問ごとに、意見を書き出し、めあてに沿って考えられていることに色つきの線を引き、ねらいに迫っていった。最後に「これからの自分はどうか」について自己内対話を促し、道徳的価値の実践化を図っていった。

(3) ゆっくり丁寧に音読をする

子どもたち一人ひとりが話の内容を理解するために、丁寧に範読することを心がけてきた。国語のように何度も教材を読むことはできないので、一読している途中で解説したり、子どもたちに確認したりしながら読むことを心がけている。

(4) デジタルコンテンツ、挿絵を活用する

指導書付属のDVD-R内デジタルコンテンツをモニターに表示して、登場人物の確認や発問の場면을、挿絵を交えて確認した。

(5) 自分の考えを書かせること

発問に対して、すぐに意見交流や発表をさせるのではなく、ワークシートに自分の考えを整理させる時間を取った。自分の考えを書くのが難しい児童もいるので、個別に声をかけて考えさせたり、ヒントを示したりした。それでも難しい時には、自分と似た考えの発言を書いてもいいと伝えて、安心して参加できるようにした。

(6) 机間巡視時に、自分の考えを書くことができているところに線を引く

自分の考えを書くことができても、発言することががてな児童もいる。そこで、机間巡視時にしっかりと自分の考えを書くことができているところに赤で線を引き○や◎をつけた。発

言することに苦手な児童も、手を挙げて発言する機会が見られるようになった。

(7) 発言時には、全員参加させること

挙手する際に、グーチョキパーで手を挙げさせた。グーは「分からなかった」、チョキは「考えたけど、みんなの前で発言するのは不安」、パーは「発言できる」という基準で全員が参加できる形を作った。また、ペアや生活班で一度交流させたり、ホワイトボードを活用して班の中で意見をまとめさせたりすることも適宜行った。

(8) 学級だよりに道德通信を掲載する

指導書付属の DVD-R 内にある道德通信を参考にし、道德の授業の様子や出てきた意見・感想を学級だよりに掲載した。道德の授業で終わるのではなく、学校生活、家庭の中で道德的価値の実践化を図るため、継続して学級だよりを作成した。

3 成果と課題

「何でそういう行動をしてしまったのだろうか」と登場人物に思いをはせたり、「自分だったら〇〇する」と考えを巡らせたりする児童が多く見られ、「こういう伝え方をしたら相手も嫌な気持ちにならない」とグループワーク時や全体交流時には考え合うことができてきたように思う。

ただ、道德で考えたことを学校生活で実践するとなると、難しいことも多いのが現状である。なので、私がクラスの中で、キラッと光る道德的価値を見逃さないように育てていくことを心がけていきたい。

どうとく3年 とくジーのおまじない。
■今日の道德の時間のねらい。
自分の生活を支えてくれている人の存在に気づき、その人たちを尊敬し、感謝する心構えを育てたいと考えています。..
..
■教材の内容。
学校から帰るとき、門の所で、必ずかけられる言葉があります。「おかえり、元気で、またあした。」これは「なかよし見守り隊」の徳田のおじいさん、通称「とくジー」のきまり文句です。そう言われると、「わたし」はなんだか元気が出てきます。だから、「わたし」はそれを「とくジーのおまじない」とよんでいます。急に雨が降り出した日、傘を届けに来た中学生のお姉ちゃんが、とくジーがいるのに気づいて、自分も高校2年のお兄ちゃんも、おまじないの言葉を知っていること、とくジーにずっと見守られてきたことを教えてくれました。「わたし」は、今日は自分が、とくジーが毎日元気でいられるようなおまじないを言おうと決めました。..
..
■子どもたちの様子。
子どもたちは、活動範囲が広くなり、家族や友だち以外のさまざまな人々と接するようになっています。しかし、その人たちと、自分の生活がどのように関わっているかを考える機会、あまり多くはないようです。家族や友だちに対して自然に抱く感謝の気持ちと同じように、自分の生活を支えてくれる人への感謝の気持ちをもってもらいたいと思います。そのためにも、とくジーのような人たちの存在に気づき、尊敬と感謝の気持ちをもって接しようとする意欲や態度を育てていきたいと考えています。..
..
■ご家庭で話し合ってください。
私たちの生活は、多くの人たちとの相互の支え合いによって成り立っています。まずは、日常の「あたりまえ」に目を向け、家庭で、学校で、そして地域などで支えてくれる人がいるからこそ、毎日安心・安全に過ごせていることを、お子様と話し合ってください。とお願いいたします。「あたりまえ」だった日常のありがたさや感謝の思いに目を向け、より良い生き方に繋がってほしいと願っております。..

4 多様性を尊重する道徳の授業 ～家族のかたちを考える～

末廣 芽衣

1 研究の目的

私たちが学校現場で関わっている子どもたちは、様々な家庭背景や、社会の課題を背負いながら日々生活している。そのような子どもたちの実態をふまえ、道徳教育の目標「(略)よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことをめざしていく。

本研究では、道徳科の内容項目 C-14「家族愛、家庭生活の充実」の授業の在り方について考える。様々な「家族のかたち」があり、多様性が尊重される現代社会、そして思春期をむかえる子ども 1人ひとりの家族への思いは異なる。そのような中で「多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める授業づくりについて」研究する。

2 研究の方法

(1) 生徒について (生徒観)

中学2年生に対して授業を行う。厳しい家庭環境で過ごし、家庭でのストレスや不安を抱える子どもも多い。生徒 A は、昨年度の道徳で「家族愛」について考えた際、教材に出てくる家族のようすと自分の家族を比較し苦しんでいた。生徒 B は、保護者との関係に悩み、保護者に自分が本当に困っていることを分かってもらえず苦しんでいた。この A や B が前を向いて授業を受けることができるような授業づくりをしていく。そのためにも、仲間の多様な意見により、A や B を始め、子どもたちの価値観が広がり、自己肯定される中で、自分の生き方について考えを深めていくことをめざしたい。

(2) 教材について (教材観)

① 教材 『異なり記念日』斎藤陽道著、医学書院、2018年 より、一部抜粋
(2021年度、茨木市採択『中学道徳2』光村図書)

② 教材の概要

“「聞こえる家族」に生まれたろう者の僕と、「ろう家族」に生まれたろう者の妻。ふたりの間に、聞こえる子どもがやってきた”と出版社の広告には書かれている。

この子ども(樹^{いっき}さん)と僕(父)との会話や、そこから生まれた「異なり記念日」について、登場人物の行動の背景にある「気持ち・思い」を考える。

3 研究の内容

(1) 本時の目標

家族の中でもさまざまながいがあり、その中でどう思いやり、どうかかわるかを、登場人物の心情に重ねながら考える。

(2) 授業の構成

導入	手話についてのクイズ(教材で出てくる手話を中心に)
展開1	本文を読み、登場人物や話の流れを整理する。
展開2	以下2つの場面の樹さん(子ども)の心情を問う。【個人→全体共有】

(補助発問)	Q1「うなだれて床をじっと見つめだした。」 Q2「こっくんとうなずいた」
展開 3 (中心発問)	Q3.「異なり記念日」という言葉には、家族に題する筆者（お父さん）のどんな思いがこめられているのだろうか？【個人→ペア・全体共有】
まとめ	Q1~3 の仲間の意見が板書された黒板をみて、感想を書く。

4 研究の結果(子どもの反応・意見)

(1) 中心発問に対する子どもの意見

「聴こえるとか聴こえないとか他にも異なる部分がたくさんあるけど、認め合っていきたい。乗り越えていきたい」「相手にはあって自分にはないものがあるのは、決しておかしいことじゃない」「自分の家族は親と子で違っている。それでもほかの家族と変わらないくらい最高の家族」「人と違うことは成長したってこと」「きこえなくても大丈夫だし、助け合えたら大丈夫」「みんな違うということを再確認してまた三人で再出発しようと決めた」 等

(2) 子どもの感想

I 「家族のカタチはたくさんあって、どれもステキだと思った。家族の中で自分と違う人がいるのを、当たり前にしていてすごいと思った」「もっていないもの、違いがあったとしても家族は家族なんだから、大切にしていきたいし、認め合えるのはいいなと思った」

II 「人それぞれ違うところがあるからこそ、いろんなことを思って考えるから、“これが当たり前”という考えは実は違ったりしているのかなと思いました」「家族の中だけで、この人たちは違いを見つけ、受け入れることができたから、これを世界中の人たちが違いを受け入れれば、差別は減らしていけると思う」

III 「自分もいろんな違いが周りとあるから、ちゃんと受け止めていけたらいいな」「いろんな生き方があってうらやましい」「人と違うっていうのは、いじめられたり差別とかになったりするから、こわいところもあるけれど、やっぱり人は1人ひとりちがうから、自分を大事にしようと思った。違っていてもいいといえる人になりたい」「公園で遊んでいる家族をみても思うことは“ほっこりする”くらい。それと同じで樹さんの両親が耳がきこえへんからといって何も思わない。私が樹さんやったらそういう考えになっていくと思う（生徒 A）」

5 考察・まとめ

I の感想から、家族のかたちの多様性について、子どもたちは考えを深めていくことができたことが分かる。また II の感想からは、社会の課題についても考えを深められていることが分かる。そして III の感想からは、自分のことと重ねて考えていることがわかる。A も自分のことと重ねて考えているようすが読み取れる。この感想の背景にある思いを教職員集団で受け止めて、引き続き A に寄り添っていきたい。B は答えを考えることが難しいようすであったが、周りの仲間の意見を聴いていた。これらの意見を聴くことで、自分の家族の在り方も多様な家族のかたちの1つとして少しずつ受け入れ、自分の生き方を考えていく土台ができていくことを期待したい。

これら子どもたちの意見は、決して本時の授業だけ養われたものではなく、これまで小中学校で積み重ねてきた集団づくり、人権教育の結果であるといえる。園田雅春（2018）は、「基盤」である道徳性を支える「基軸」が人権教育であると述べている。（『道徳科の「授業革命」』園田雅春著、解放出版社）「基軸」を作りながら、「基盤」である道徳性を養うことを忘れずに、今後も道徳の授業づくりの研究を進めていきたい。

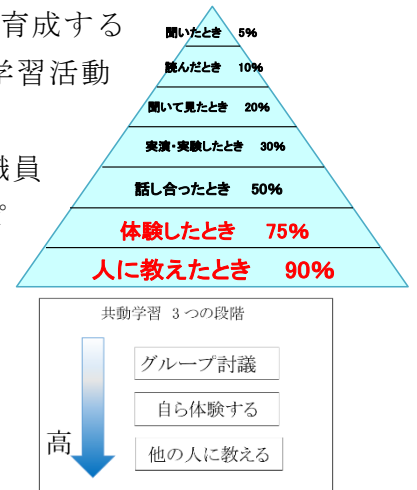
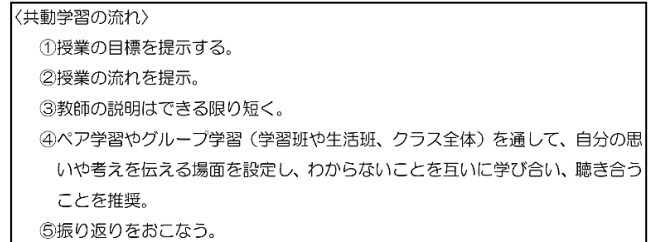
5 「一人も見捨てへん」道徳教育の推進

遠藤 佳祐

1 学校の取組み

本校では、よりよい人間関係づくりのために、「共動学習」の取組みを進めている。この取組みは、「つながり合い、学びを深め合う学習集団づくり」を目標に全教員ですすめており、①学習内容を深く理解し、自ら学ぶ姿勢を育むこと、②主体的・対話的で深い学びを通して、仲間とつながる集団を育成すること、の2点をねらいとして各教科での授業や学活・総合などの学習活動を行っている。

また、全教員の共通理解をはかるために、「共動学習の流れ」を職員会議や各学年の会議を通して確認している。各教室には「学びのピラミッド」と「共動学習 3つの段階」(下記)を掲示し、教師だけでなく、生徒も常に「共動学習」を意識しながら活動を行えるよう工夫している。



2 道徳の授業における取組み

(1) 人権・道徳教育委員会の設置

時間割内で会議をもち、毎週1回の会議を行っている。管理職・首席・学力向上担当チーフ・支援学級担任・各学年代表3名ずつで構成され、人権教育委員会と連携しながら、各学年の生徒の様子や取組みを交流している。また、学校全体で取り組むべき教育課題や、各学年の状況に合わせた取組みについて、学年の枠を超えて議論を重ね、よりよい教材や授業づくりに繋がる時間となっている。

(2) ローテーション道徳

各学年で、学年の教員が交代で学年の全学級を回って授業を行う「ローテーション道徳」の取組みを年間2回行っている。どの学年も学年所属の教員が10名程度いるため、およそ20時間分の授業をローテーションにて行っている。各教員が作成した指導案等教材は、校内の共有ネットワーク上に保存し、教員同士で共有できるようにしている。

(3) 道徳ノート

本校では、ほぼすべての道徳の授業で、道徳ノートを使用している。教員は、道徳ノートのつくりに沿って「中心発問」、「テーマ発問」を意識しながら授業づくりを行う。生徒は、記述でのふりかえりだけでなく、数値での自己評価を行い客観的に自己をみつめる活動を取り入れている。

(4) 研修会の実施

本年度本校では、四天王寺大学 杉中 康平 教授を講師としてお招きし、校内道徳科授業づくり研修会を実施した。「『教科』時代の道徳を創る」というテーマのもと、主に読み物教材を使った授業づくりについて、「教材資料の構造や読み取り方」「中心

発問・補助発問の作り方」等の基礎・基本や理論をご教授いただきました。

また、杉中教授が提示する模擬指導案を添削するグループワークを行った。ワークの中では、より道徳的価値に迫ることができる中心発問は何か、補助発問の数はどうするか、ふりかえりでどのように自己の生き方につなげさせられるか等、実際の授業づくりにつながる活発な協議を行うことができた。

また、この研修で学んだ内容をもとに、杉中教授の指導を仰ぎながら授業づくりを行い、12月に授業研究会を実施した。



3 取組みの成果と今後の課題

ローテーション道徳を通して、何度も同じ教材で授業を行うことによって、教員の授業力向上につながり、専門の教科や得意分野を生かした魅力的な道徳の授業を展開できている。また、生徒たちも新鮮な気持ちで授業に臨むことができ、毎回違う教材での授業や、さまざまな教員とのかかわり、多様な価値観に触れることで、道徳性の成長につながっている。

4 終わりに

これからの子どもたちは、AI（人工知能）の進化やIoTの進歩、グローバル化など変化の大きな新しい社会（Society 5.0）を生きることになる。これらの社会に対応するためには、多様性を受容し、他者と協同し、最適解を見つけることが求められる。このような力を育成していくためには、「考え、議論する道徳」の授業づくりが必要である。

本校の取組みでは、「共働学習」により子どもをつなげ、「ローテーション道徳」により、担任以外の教員の価値観も子どもたちに学ばせることができた。これらの成果により、多様な他者や価値観を受け止め、互いが尊重し合える素地は育めたと感じている。一方、道徳科の授業の内容は、「読み物教材」を活用した道徳的諸価値の理解を中心とするものが多く、そこから「自己を見つめさせ」「物事を広い視野から多面的・多角的に考えさせ」「人間としての生き方についての考えを深めさせる」かが課題となっている。これらの課題を解決し、子どもたちの道徳性をより育むため、これまでほとんど取り組めていなかった「問題解決的な学習」や「体験的な学習」を推進していく必要があると考える。今後は、これまでの研究成果を土台に、より子どもたちの道徳性を育めるような授業内容の研究を進めていきたい。